



熟年離婚の増加

「結婚を考える①」

熟年離婚が増えている。先日、妻に後期高齢者手元の資料は二〇一四年保険証が送られてきた。度のものだが、結婚して二十年以上の大婦の離婚は三万六千八百件、二十五年前に比べると七割も増えているとある。

別の資料では、結婚二十年以上での離婚はこの十年間で二倍、三十年以上は三倍に増加したとある。熟年離婚の定義はないが、例えば五十五歳以上の離婚でも、結婚生活が五年や六年のものは含まれず、少なくとも同居生活が二十年なり、二十五年という長期の結婚生活の後の離婚のことである。

考え方が最近変化している

離婚は本人のその後の実行するにはかなりのエネルギーが必要である。結婚に不満を持つていても我々高齢者にはそれだけのエネルギーもなく、あきらめて離婚しないだけのことかもしれない。

つまり、結婚も離婚も一千差万別、一律に論ずるようなものではない。

しかし、結婚に対する考え方があくまで「結婚を考える」ということから離れて、夫婦の問題ではなく、夫婦の問題ではない。夫婦の問題ではない。夫婦の問題ではない。

私は統計からだけではなく、自分の体験からも離婚生活を見詰め直そうと思う出来事にぶつかる。昨年末、盲腸で二十二日間入院したが、その退院の日のことだ。入院中、一人暮らしをせざるを得ない妻のためにしばしば山口から娘が来てくれ、その日も娘の車で退院した。家に入り、元気よく「ただいま」と言つたのであるが、妻は暗い顔をして「おかえり」と言つて再び本にかかった。

本箱でほこりをかぶつていた、三十年前に学んだテキスト「顔と顔とを合ふて、より幸せな夫婦になるには」を取り出した。

もともと妻は車を運転しない。その上、数年前の脳梗塞の後遺症で左半身に麻痺(まひ)が残り、杖を使い、外出はすべて私が頼りである。だから私の入院中は一人暮らしである。

ところから、聖なる秘跡としての結婚を軽んじて余りに日常的な営みでいる傾向がある。とにかく、二十年も三十年も結婚生活を営んだあとでの離婚が大幅に増えているのは今日の「結婚の危機」という現象の一つの表れではないだろうか。実は統計からだけではなく、自分の体験からも離婚生活を見詰め直そうと思う出来事にぶつかる。昨年末、盲腸で二十二日間入院したが、その退院の日のことだ。入院中、一人暮らしをせざるを得ない妻のためにしばしば山口から娘が来てくれ、その日も娘の車で退院した。家に入り、元気よく「ただいま」と言つたのであるが、妻は暗い顔をして「お

かえり」と言つて再び本にかかった。

改めて読む。熟年離婚は他人の問題ではなく、自分たちの中にもその芽があることに気づく。

自分の体験も通して、本当に長期間の入院のストレスからと思われるが、妻は変わった。笑顔がなくなり、物ごとを否定的にとらえる。小さなことと言わ

とは、誰にも大小は別とし

て精神的離婚の兆候はあるということだ。

こんな時、私が感情的に声を荒げたりすれば、妻はますます自分の殻に閉じこもり、状況はさらに悪くなる。長い結婚生活で妻に対する優しさ、対話など配慮が欠けていたのも事実だ。

あきらめではなく、互いに信頼し、より一致した結婚生活を営むことは成り立つ。努力も大切なことだ。結婚生活に卒業などない。

け娘が來てくれた。「一人暮らしの方が氣楽で良い」と弱味は見せなかつたが、本当に…。

では、結婚は秘跡、つまり神の恵みであり、本来もつと聖なるものである。それが余りに日常的な営みで

いる傾向がある。

では、結婚は秘跡としての結婚を軽んじて余りに日常的な営みで

いる傾向がある。